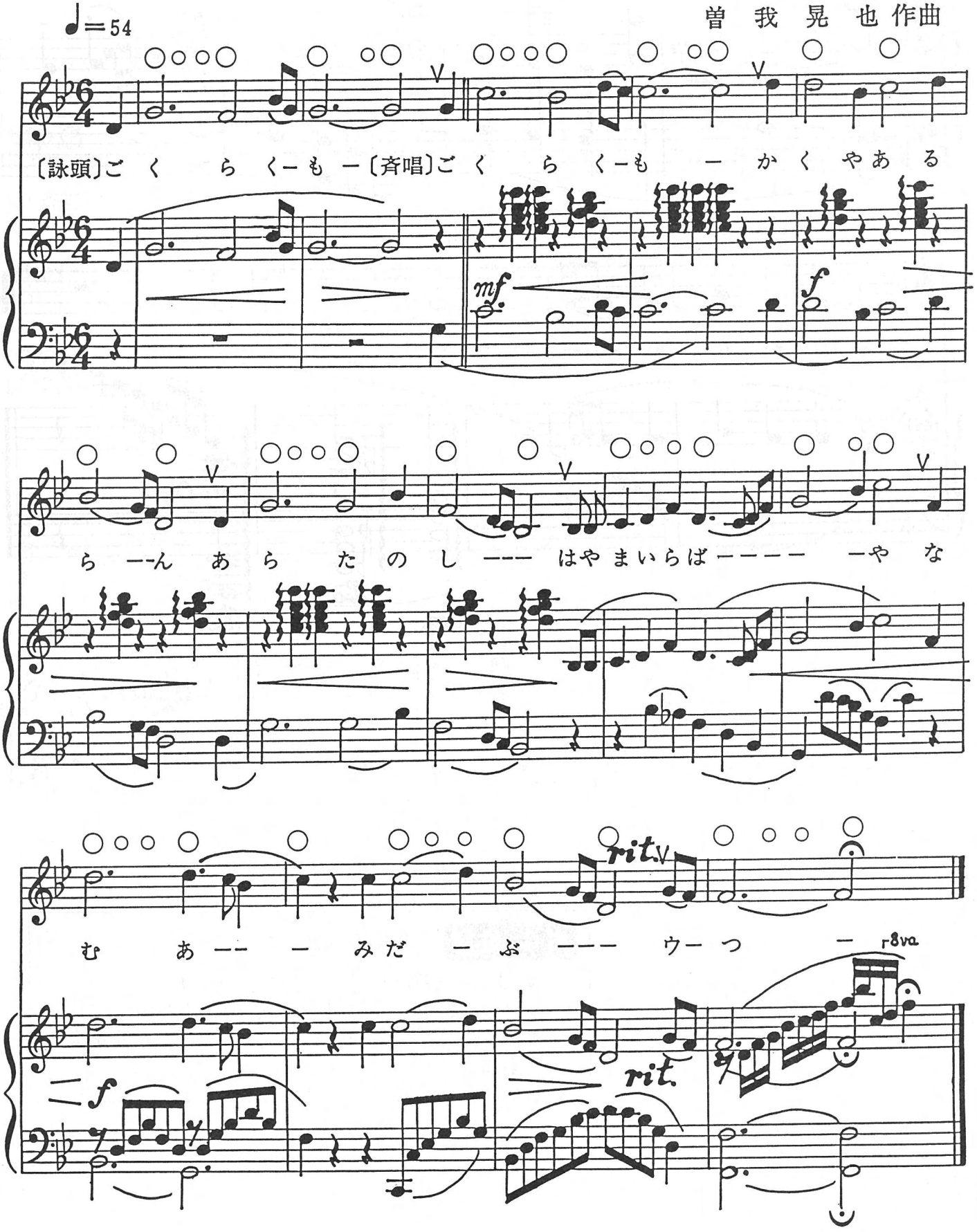
第八番　報恩講寺の御詠歌（報恩調）

曽我晃也作曲

第八番　紀伊の国　報恩講寺

極楽も　かくやあるらん　あらたのし　はや参らばや　南無阿弥陀仏
（法然上人御作）

法然上人、讃岐の配所に着かれてから約９カ月の後、承元元年（1207）12月、御赦免の宣が下りました。この配所からお帰りの途中、暴風雨に遭って船は流され、加太の浦に漂着しました。土地の豪族孫右衛門はじめ、村人一同が法然上人を心からお迎え申し、寒さと疲れを慰めました。村人たちは上人の慈眼温容を拝し、心から帰依して本願念仏の教えを蒙り、「南無阿弥陀仏」と唱えるお念仏の声が、この地に高らかに弘まったのです。
（上人が讃岐へ配流のさい、塩飽島の高階保遠入道西忍の館に着かれ温かいもてなしを受け、上人の教化により、島中がお念仏の声に包まれた時に詠まれた、と言われております。）

大意　皆さまの心からのおもてなしを受け、うれしい気持ちでいっぱいです。それにもまして皆さまの一心に唱えるお念仏の声が高らかに響いていることは、何よりもこの上ない喜びです。この様なお念仏の声が満ちあふれている極楽浄土へ、早くお参りしたいものです。南無阿弥陀仏。

ポイント注意
- ６拍子の曲です。
- ６拍目の弱声から始まる「弱起」の曲です。したがって声の立ち上がりはソフトに。
- 左手は鈴をとらず、指をそろえて左ももものつけ根に置きます。